

第7章

国民国家イランにおける「地方史・誌」の 出版と中央・地方関係

問題の所在

今世紀初頭に立憲革命（1905～11年）を経験することで国民国家としての明確な自己主張を始めたイランでは、その後一貫して中央集権化政策がとられ、国民経済の形成と発展が図られ、国家（国民）統合が推し進められてきた。1925年に成立したパフラヴィー王朝下においても、79年に誕生したイスラーム共和国政権のもとにあっても、この基本的方向性は変わっていない⁽¹⁾。

イラン高原を中心とする一帯は古くからイラン・ザミーンあるいはイラン・シャフル（いずれもイランの地の意）と称され、まとまった一つの地理的範囲として認識されてきた。というよりは、そうであると強く意識されてきたと言った方が正確かもしれない。ところが、実際は、この地を彩る自然的・地理的条件の多様性と、幾重にも交差し錯綜する歴史的経験は、結果として多様な住民分布と複雑な社会構成を生み出し、その相互の有機的関連の希薄さは、さながら「モザイク社会」（A・アブラハミアン）とでも呼びうるような様相を呈するものであった⁽²⁾。このことが逆に、域内の各地域の一定程度の政治的自立性を保障したのみならず、経済・文化・社会の分野においても、それぞれの地域が相対的独自性を培う土壌を提供してきたと考えることができる。

ところが、国民国家への道を歩みはじめるや、否応なく、各地域は、首都

であるテヘランという「中央」に対する「地方」として位置づけられ、「中央」によって統合され、支配される対象に組み込まれることとなった。同様の関係が、各地域の中心(都市)と周縁部との間でも形成されていった。今世紀を通じて不断に続けられてきた「中央」による統合の過程では、それぞれの地域の独自性と主体性を主張するさまざまな行動が展開され、場合によってはそれが蜂起や反乱にまで発展することも少なくなかった。アゼルバイジャン地方におけるアーザーディスタン運動(1920年)やアゼルバイジャン国民政権の樹立(1945~46年)、ギーラーン地方におけるジャンギアリー運動やギーラーン共和国の樹立(1920~21年)、ホラーサーンにおけるタギー・ハーン大佐の蜂起(1921年)、アラベスタン(フーズスタン)におけるシェイフ・ハズアルの抵抗、そしてクルド人勢力に支えられたクルディスタン(マハーバード)共和国の樹立(1946年)などにその典型的な事例を見ることができる。

こうした状況の背景として、先ず考えられることは、イランの場合も、特定の地域が特定の民族集団の居住・生活圏と重なりあっていることである。アゼルバイジャンはトルコ系アゼルバイジャン人、コルデスタンはコルド人、フーズスタンはアラブ人、バルーチェスタンはバルーチ人といった具合にである。その結果、国民国家イランにおける中央・地方関係とは、単に、「中央」と「中央」によって不可避免的に「地方」に位置づけられることとなった各「地域」との緊張関係として表象するのみならず、これと表裏一体をなす少数民族問題としても現出することとなる。

ところで、「中央」に対する「地方」の自己主張は、こうした政治的・物理的な異議申し立て以外にも、様々な次元において、また様々な方法を用いて行なわれてきた。その一つに、いわゆる「地方史」や「地方誌」の編纂・出版活動がある。郷土史家などによる「郷土意識」の発揚を狙った郷土の歴史の掘り起こしなどがその典型的な例であろう。

もっとも、「地方史」や「地方誌」は、これとは全く相反する一面も持っている。「中央」による統合の証としてのそれである。つまり、中央の大学や研究所、さらには政府機関によって、いわば国策の一環としてすすめられる、

国民国家「イラン」という全体を構成する各「部分」をジグソウパズルの様に埋め合わせてゆき、その統一体としての全体像を浮かび上がらせる象徴的作業として位置づけることも可能であろう。とはいえ、イランの場合は中国などとは違い、公権力によって網羅的・体系的に「地方史・誌」の編纂事業が展開されてきたわけでは必ずしもない。それでも、立憲革命期を機に高揚をみせるイラン・ナショナリズムを、自らの政権のイデオロギーに巧みに取り込んだパフラヴィー政権のもとでは、イラン・ザミン内の各地域における「イラン民族」の輝かしい歴史的事跡を掘り起こす一大事業が次々と計画されていった。代表的なものを2, 3 あげておこう。1922年、レザー・ハーン（後のレザー・シャー）を名誉総裁に迎えて「国民の遺産協会」(Anjoman-e Āthār-e Mellī) が設立されたが、その設立の目的は、「イランの古い学芸・工芸の遺産に対する大衆の関心を育成し、美術・工芸作品類を保存し、その伝統様式を守ること」(協会定款第1条⁽³⁾)であった。実際に、フェルドゥスィー廟の建立(1928年)をはじめ、エブネ・スィーナー廟やサアディー廟、さらにはナーデル・シャー廟の建立・改装事業を精力的に行なった。こうした顕彰事業を通じた国民文化の育成と並行して、当協会が力を注いだ事業に出版活動がある。イスラーム革命時(1979年)までに130点ほどの出版物が世に問われているが、そのうちの40点はいわゆる「地方史・誌」関係のものであった。1953年にエフサーン・ヤールシャーテルのイニシアチブによって設立された「文献翻訳・出版協会」(Bongāh-e Tarjome o Nashr-e Ketāb) も、「イラン学シリーズ」(Majmū'e-ye Īrān-shenāsī), 「ペルシア語原典シリーズ」(Majmū'e-ye Motūn-e Fārsī) などの出版シリーズを通じて「地方史・誌」関連の出版を行なってきた。また、1964年、ファラ王妃の財団の支援を得て設立された「イラン文化協会」(Bonyād-e Farhang-e Īrān) も、「イラン文化に貢献し、イランの精神的遺産の保持に尽力し、ペルシア語の純化・完成・普及に努め、イラン文化を他国民に知らしむる」(規約第1項⁽⁴⁾)という基本的目的のもとに、出版活動にも多大な努力を傾けてきたが、「イランの歴史・地理史料」(Manābe'-e Tārikh o Joghgrāfiyā-ye Īrān) シリーズとして刊行された「地方

史・誌」関連文献は、その重要な部分を占めている。この「イラン文化協会」は、イスラーム革命後は、新政権によって文化研究所(Mo'assese-ye Motāle'āt o Tahqīqāt-e Farhangī)として再編され、同様の活動を引き続き担当している。

このように「地方史」や「地方誌」の存在は必ずしも中央に対する「地方」の自己主張としてのみ捉えることはできず、反対に、国家が多様性を前提としつつも、それを包摂し、全体としての国民国家的一体性を強調しようとする場合にも、一定の積極的役割を果たすことになるだろう。

個々の「地方史・誌」がどのような意図で編まれ、いかなる特質を有するものかは別にして、一つ明らかなことは、「地方史・誌」はその性格上、何らかの意味での「中央」と「地方」の関係を必然的に表象することになるということである。この点に着目して、本稿では、国民国家という枠組みに嵌め込まれたイランにおける「中央」・「地方」関係の在り方を、「地方史」や「地方誌」を材料として、分析することにある。

第1節 「地方史・誌」とは

そこで、本稿で分析の対象とする「地方史」・「地方誌」とは何かをまず明らかにしておく必要があるだろう。結論的に言えば、とりあえず現在の国民国家イランが領有している地理的領域の内の、ある特定の範囲の歴史や地誌を主たる記述内容としている文献と考えておこう。換言すれば、ある特定の地域の自然的・文化的特性(=地域性)の記述を目的として著された文献一般を広くこの範疇に含めて考えることにしよう。

ある地域に特定された研究を地誌学(CorographyあるいはCorology, 近年ではRegional Geography)として発展させてきたのは近代地理学であるが、特定の地域の地理的現象、風俗、習慣、民俗誌などを記録した書物としての広い意味での地誌は古い歴史をもつ。こうした地誌を意識的かつ系統的に発展さ

せてきたのは中国であり、それらは「地方志」と総称される。これは中国全体の地理書を「総志」と呼ぶことに対応しているという。

中東・イスラーム地域においては、ギリシア文化の伝統を受け継いだ地理学を基礎に、地誌の記述はイスラーム期に入り飛躍的に発展した。その理由の一つに、イスラームが聖地メッカへの巡礼を重要な宗教的義務としてきたことが考えられる。つまり、巡礼を無事に終えるためには途中の地理に熟知し、十分な情報を掴んでおくにしくはない。そのため、諸国の事情に対して旺盛な関心が払われてきた。もっとも、この地域では、古くから都市と都市、オアシスとオアシスを結ぶ広域ネットワークが発達し、ヒトとモノと情報の移動が盛んに行なわれてきた。こうした事情を背景に、中東・イスラーム地域においては今日まで幾多の地理書・地誌・旅行記が著わされてきた。

イランにおいても例外ではなく、この種の著述は一つのジャンルとして確立されているといってもよい。もっとも、本稿で用いる「地方史」ないしは「地方誌」という用語に過不足なく対応するペルシア語の表現が、必ずしも存在しているわけではない。まずは、特定の地域に関する「……の歴史」(Tārikh-e ……), 「……の地理」(Joghrafiyā-ye ……)あるいは「……の歴史と地理」、さらには「……の歴史地理」(Joghrafiyā-ye Tārikhī-ye ……)と題された一連の文献が想起される。この場合のペルシア語の語彙としての「ジオグラフィア」(joghrafiyā)は事実上「地誌」を意味していると考えてもよいであろう。加えて、特定の地域を対象とした名士列伝、民俗誌、あるいは社会言語学的立場から行なわれた方言調査の報告、現状分析なども、本稿の観点からすれば、広い意味での「地方史・誌」に含めて考えてよいであろう。

ところで、そもそも、「地方」という表現自体、大きく分けて2通りの意味が考えられる。一つは全体の中の一部(地域)でありながら、その範囲内ではある共通性・一様性を有し、その特有の個性(=地域性)によって、他地域とは区別される特定の地域⁽⁵⁾という意味である。こうした概念に相当するペルシア語表現としては、mahall, nāhiye, diyār, mantaqeなどが考えられる。本稿で用いる「地方史」・「地方誌」の「地方」とは、基本的にはこの意味合

いである。一方で、「地方」は「中央」に対する「地方」の意味も持っている。中国における「地方志」という場合の「地方」はむしろこの意味合いであろう。これに相当するペルシア語表現としては、今日では「シャフレスターン」(shahrestān)が一般的であろう。例えば、日常的にも、首都テヘランからどこか他の地域や都市に行く場合に、『シャフレスターン』へ行く」と表現される。このほかにもかつての地方行政単位であった「エヤーラト」(eyālat)や「ヴェラーヤト」(velāyat)といった言葉が用いられることもある。ちなみにこの「シャフレスターン」という表現は、現在のイランにおいて州(オスターン)の下位に位置する地方行政単位であるシャフレスターンからの意味転化であると考えて間違いないであろう。

第2節 「地方史・誌」と問題意識

本稿が目的としている「地方史・誌」の出版状況およびその内容の分析を通じて国民国家イランの中央・地方関係を考察しようという視点からの先行研究は、イラン本国においてはもちろんのこと、諸外国においても、管見の限りでは存在しない。このことは「地方史・誌」関係の出版目録が皆無に等しいことから確認できる。一方で、革命後のイランにおける出版動向の中では、特定の地方(地域)に関する書誌・目録(ketāb-shenāsi)の刊行が目につく。すでに、アゼルバイジャン、ホラーサーン、ファールス、ギーラーン、マーザンダラーン、スィースターン・バルーチェスターン、ロレスターン、ペルシア湾岸地域などの諸地方に関して刊行されている⁽⁶⁾。また、首都テヘランに関しても同様の書誌が出版されている。もっともこれは革命後に特有の現象というわけではなく、パフラヴィー時代にもいくつかこの種の出版物は確認できる⁽⁷⁾。しかし、これらはいずれも、当該地方(地域)に関する記事を含む文献を網羅的に収集したものであり、必ずしも執筆意図や記述内容が当該地方(地域)に特化・限定されている文献のみを収録の対象とはしていな

い。つまり、本稿が意図しているような「地方史・誌」に限った書誌・目録とは基本的に性格を異にしていると言えよう。

それでは、いわゆる「地方史・誌」はこれまで一般の書誌・目録の中ではどのように扱われてきたのであろうか。最も一般的なのは、「イランの地理」(Joghrafiyā-ye Īrān)あるいは「地方史」(Tārikh-e Shahrestān-hā)といった分類項目が設定され、そこに当該文献が押し込められる形である。そうした中であって、本稿の意図とも沿う形で、積極的・意識的に「地方史・誌」の収録が試みられているのが、マリアム・ミール・アフマディー(Maryam Mir-Ahmadi)とゴラーム・レザー・ヴァルハラム(Ghorām Rezā Varharam)が作成した『テーマ別イラン史文献目録』(*Ketāb-shenāsi-ye Mowzū'i-ye Tārikh-e Īrān*, Tehrān, Mehrdād, 1362 <1983/84>)であろう。本書では、「地方の歴史地理および地方史」(Joghrafiyā-ye Tārikhī va Tārikh-e Mahalli)という分類項目が設定され、ここに「地方史・誌」の類が収録されている。その総点数は314点、地域(地方)分類は76項目である⁽⁸⁾。点数としてそれほど多くはないが、実際に高等師範大学、イスラーム議会図書館、テヘラン大学中央図書館、イラン国民図書館、ベヘシュティー(旧メッリー)大学図書館で調査し、収録したものであり(同書まえがき)、この種の目録としては、現在のところ唯一といってよく、新たな問題意識の萌芽をも窺わせる貴重な仕事と言えよう。

さて、今回、筆者が最終的に収集しえた「地方史・誌」の総点数は1524、地域分類項目は284である⁽⁹⁾。この収集データが、実際に発行されている「地方史・誌」総体のどの程度にあたるのかは言明しかねるが、前掲の『テーマ別イラン史文献目録』と比較しても、数量・質ともにはるかに充実しており、少なくとも現時点において、この種のデータとしては最大の内容を備えていると言えよう。また、本稿が掲げる基本的問題意識にそった分析にも十分に耐えうる点数であると考ええる。

第3節 「地方史・誌」の対象地域をめぐる問題（分析1）

章末の表1は、今回収集しえた個々の「地方史・誌」が、叙述の対象として扱っている地域（地方）に着目し、それを基準に整理・分類したものである。その際、各「地方史・誌」の表題の中で実際に掲げられている地名・地域名称を可能なかぎり忠実に収録し、それぞれ別個の地域（地方）項目として立項した。その結果、コルデスターン地方の旧称である「アルダラーン」（Ardalān）はコルデスターンとは別項目となっているし、「ギーラーン」と「ダイラメスターン」（元来はギーラーン地方の山岳地帯を特に指したが、後にほぼ同義となる。ただし、その具体的範囲は時代によりかなりの伸縮あり）、「マーザンダラーン」と「タバレストターン」あるいは「ルーヤーン」（タバレストターンはマーザンダラーンのイスラーム時代の旧称、ルーヤーンは現在のマーザンダラーンの西部に相当）、「ゴルガーン」と「アスタラーバード」（ゴルガーンの旧名）、または「バルーチェスターン」・「スィースターン」・「スィースターン&バルーチェスターン」がそれぞれ別の地域（地方）項目として立項されている。また、各地域（地方）項目が実際に意味している空間的広がりやの規模もまちまちである。エマーメ、アンバラーン、アンジールダーン、あるいはユーシュのように一つの村落、郷を示している場合もあれば、「アゼルバイジャン」とか「ホラーサーン」、「ファールス」、「ペルシア湾岸」といった具合に相当の広域を意味する場合もある。また、ある一つの都市を扱っている場合もあれば、都市を中心とするその周辺地域を含めた範囲を意図している例もある。これは都市とその周辺地域を一体の範囲として認識しているわけで、それ自体が地域認識の在り方を探るうえで興味深い対象となるであろう。

以上の諸点を念頭に置いたうえで、まず、各「地方史・誌」が表題に掲げている地域名と国民国家としてのイランにおける実際の地方行政区画の名称とのズレに注目しながら、若干の検討を試みてみることにしよう。

最初に、「ギーラーン」と「マーザンダラーン」を考えてみよう。この両者

を分ける境界域に関してはこれまで若干の変動があったものの、少なくとも19世紀以降における地方統治の単位としては常に別個の地方として扱われてきたし、また、そのように認識されてきた。ところが、これまで出版された地誌のレヴェルでは、内容的に両者を一体のものとして扱っているものが16点ある（このうち、表題に「ギーラーン&マーザンダラーン」と明記されているものが5点、「ハザル海〈あるいはマーザンダラーン海〉の沿岸部」として扱われているもの6点、単に「イラン北部」となっているもの5点）。ギーラーン地方関係のものの総点数80点、マーザンダラーン地方関係のものの総点数31点と比較すれば少ないとはいえ、その示唆する事柄は十分に興味をそそる。つまり、言語文化の面ではそれぞれ固有の特徴を備えているとはいえ、共にカスピ海南岸に位置し、同様の気象条件と自然景観に恵まれ、稲作を中心とした集約農業が展開する地域としての共通性に着目すれば、イランという国家的枠組みを前提にすると国内の他地方との比較において、両者の類似性は一層鮮明となる。ここに両者が地域認識の枠組みとしては、容易に一つの単位としてくられる素地があるように思われるのである。

「バルーチェスタン」と「スィースターン」の関係も興味い。両者共々、歴史的には古い来歴を有する名称である。ただ、19世紀以降の行政区分を見てもと⁽¹⁰⁾（表2）、1937年の「国家行政区分法」の施行までは、「バルーチェスタン」は「ケルマーン」と、「スィースターン」は「ホラーサーン」と一体化した扱いとなっている。それが、1961年に施行された「帝国区分」になると、「スィースターン&バルーチェスタン」という一つの別個の州を構成するようになる。こうした地方行政区分上のゆれを反映してか、「地方史・誌」のレヴェルでも「バルーチェスタン」の19点、および「スィースターン」の14点に対して、「スィースターン&バルーチェスタン」という現在の行政区分に沿った地域設定を採用しているものが9点といった具合に、数値上はかなり拮抗した状況を呈している。

さて、「コフギールーエ&ボエル・アフマド」州（1342〈1963/64〉年設置）とか、「バフティヤーリー&チャハールマハール」州（1337〈1958/59〉年準州

として設置), さらには1980年代に新設された「ホルモズガーン」州のような比較的近年に設置された行政区画に沿った地域設定区分があるかと思えば, 国家が設置した行政区画の名称とは全く無関係な名称を採用することで, 独自の地域認識を主張しようとしている「地方史・誌」も存在する。ガスラーン(Qasrān), グーメス(Qūmes), キャマレ(Kamare)などはその好例であろう。ほかにベイハグもあるが, これは12世紀に著された『ベイハグ史』の校訂版であるから, いくぶん事情は異なっていると考えられる。ところが, ガスラーン, グーメス, キャマレに関する地誌はいずれも近年の編纂にかかるものであり, それぞれの初版年は1356(1977/78)年, 1344(1965/66)年, 1369(1990/91)年である。

ガスラーンとは, レイの北方, アルボルズ山脈南麓に広がる一帯の古名であり, レイのガスラーンとも呼ばれた。シェミーラーン(Shemirān), ラヴァーサーン(Lavāsān)を中心とした上ガスラーン(内ガスラーン)と, タジリーシュ(Tajlish), キャン(Kan), ヴァナク(Vanak)辺りの下ガスラーン(外ガスラーン)から成る。要するに現在の首都テヘラン市の北部および東北郊外一帯を指す。グーメスとは, 同じくアルボルズ山脈の南麓のキャヴィール沙漠との間に, ホラーサーン街道に沿って延びる細長い一帯を呼ぶ古名で, レイの東からジャージャールム手前辺りまでの古名である⁽¹¹⁾。これは現在の行政区画でいえば, ほぼセムナーン州に相当するが, 『グーメス史』の著者は, 「……この地方は様々な名称で呼ばれてきたが, イスラーム期以後の地理書や歴史書の著者の多くが, この名で記録しているのでそれに従った」⁽¹²⁾として, 現名のセムナーンではなく, あえて古名のグーメスを用いたところに著者のこだわりを垣間見ることができよう。ちなみに, ガスラーンもグーメスも, 少なくともガージャール朝期(1796~1925年)以降は地方行政区分の名称として登場したことはない。

一方, キャマレはエラーケ・アジャム地方(イスラーム期には広大な広がりをも有し, ジバルとも呼ばれた)内の一地方名で, 現在のホメイーン, マハッラート, アーシュティヤーン辺りを指す旧称である。キャマレは1880年代にガー

ジャール朝下イランの諸国事情を記した『諸国の鏡』⁽¹³⁾には、ゴルパーエガー
ン、ハーンサールと共に王朝の版図を構成する州（ヴェラーヤト）の一つとし
てその名称を留め（表2参照）、立憲革命期に制定された選挙法（1906年，1909
年，1911年）においても、州名およびその下位区分である郡（ボルーク）の名
称として用いられている⁽¹⁴⁾。ところが，1937年の「国家行政区分法」になる
と，州（オスターン）やシャプレスターン・レヴェルではもうこの名称が用い
られることはなく，わずかにホメインを中心とするパフシュの名称として登
場するのみである⁽¹⁵⁾。そして現在ではもう，公式の行政区分の名称としてそ
の名を目にすることはない。

行政区画と実際の地域認識の在り方とのズレを示すもう一つの例を示そう。
アゼルバイジャンは，イスラーム期以降常に，単一の地域として考えられ，
統一政権による地方統治のうえでも単一の行政区画を成してきた。ところが，
レザー・シャー政権下の1937年に制定された「国家行政区画法」により，初
めて東アゼルバイジャン州と西アゼルバイジャン州に分けられることとなっ
た。以後50年以上にわたって東西二州体制が維持されてきた（1993年にはアル
ダビール州が東アゼルバイジャン州から分離）。ところが，アゼルバイジャンを対
象とした「地方史・誌」全158点の中で，東・西アゼルバイジャン州のどちら
かのみを扱っているもの，あるいは両者を分けて扱っているものは，わずか
に22点で全体の14%程度にとどまっている。つまり，行政上は分けられてい
ても，実際の地域認識のうえでは依然としてアゼルバイジャンという枠組み
が生きつづけているということであろう。

実はこのことは他の諸地域に関しても概ね妥当する。前述のギーラーン，
マーザンダラーンはもとより，ファールス，ケルマーン，ホラーサーン，エ
スファハーンといった長い歴史的背景を有する地域認識の枠組みは，国民国
家イランにおける地方行政区分の画定に際しても，その枠組みが全く無視さ
れるということではなく，むしろ大筋では継承される方向で進んできていると
見てよいであろう。つまり，国民国家イランにおける行政区画の再編も，実
際には，伝統的な地域認識の枠組みの根本的な組み替えということを意味し

たのではなく、そうした個々の大枠内部での若干の手直し、あるいは大枠相互の境界域の微調整といった程度にとどまっていると考えるべきであろう。

次に「地方史・誌」の分布状況の検討に移ろう。まず、都市（場合によってはその周辺地域をも含めた範囲）ごとの点数を比較してみよう。

点数のうえではエスファハーン（エスファハーンは都市名であると同時に州名でもあり、内容的に両方を対象としているものも多くある）が57点、タブリーズが55点、テヘランが38点（これにシェミラーン3点、レイ7点を加えると48点）の順で続いている。イランの代表的な歴史都市としてのエスファハーンはその観光都市的性格からすれば不思議ではなく、事実、エスファハーン関係の地誌・歴史書としては、いわゆる歴史上の名所・旧跡解説、歴史的建造物の研究書なども数多く含まれている。

タブリーズはサファヴィー朝時代頃からアゼルバイジャン地方の中心的位置を占め、ガージャール朝期には国内で最も経済的に発展した都市であったことを考え合わせると然るべき位置であろう。

首都テヘランはその発展の歴史は浅い（18世紀末以降）とはいえ、すでに200年以上にわたってイランの政治の中心でありつづけたという重要性からすれば当然の結果であろう。これに続くのがケルマーン46点（ケルマーンも都市名であると同時に州名でもあり、両者は渾然一体として扱われている場合が多い）、マシュハド35点、シーラーズ33点、そしてゴム30点である。シーラーズはファールス地方の中心としての政治的重要性に加えて、歴史的都市として観光資源にも恵まれ、イラン文化を代表する街としてのイメージが大きく貢献していると考えられる。一方、マシュハドはイランの国教である12イマーム派シーア派イスラームにとって重要な位置を占める8代目イマーム・レザーの墓廟の所在地であり、年間数百万人を下らない巡礼者を集めている宗教都市である。ゴムもまた、イマーム・レザーの妹ファーテメの墓廟「ハズラテ・マアスーメ」を擁し、イラン国内でもマシュハドに並ぶ聖地であると同時にイスラーム教学の府であることを考慮すると得心がいく。以下、カーシャーン16点、ヤズド16点、ニーシャープールが10点、ハメダーンが9点と続く。この

ように見てくると、歴史的重みと伝統を背負った地域性豊かな都市は例外なく「地方史・誌」の対象としても確固とした存在を主張していると言えるであろう。

次に、こうした都市を含むより広い範囲に基準を設定して、分布状況を考察してみることにしよう。こうした観点からの分析に応えるべく、「地方史・誌」の分布状況をいわば大地域ごとに整理し、まとめ直したものが表3である。

ここでいう大地域としてのアゼルバイジャンとは、現在の行政区分に従えば東アゼルバイジャン州、西アゼルバイジャン州、それにアルダビール州を合わせた範囲をいう。当該地域の全人口約700万人（1991年）の大部分は国教であるシーア派12イマーム派に属しているとはいえ、言語的には、イランの公用語ペルシア語とは系統が異なるチュルク語系のアゼルバイジャン語の話者によって占められる。こうしたペルシア人やクルド人とは明確に区別された《トルコ人（tork）》としての強い自己意識を背景にレザー・シャー期以降に特に顕著となる中央集権化にともなうアゼルバイジャン地方の政治的・経済的地位の相対的低下と周縁化の中で、こうした趨勢に反発するかたちでアーザーディスタン運動、アゼルバイジャン国民政権の樹立、イスラーム共和国成立後のタブリーズ暴動など、反中央政府、自治要求運動が相次いだことはすでに述べた。このように国民国家イランの中で最も強い自己意識を有する最大の「マイノリティ」であるアゼルバイジャン人の居住地域であるアゼルバイジャン関係の「地方史・誌」の点数が274点と最も多くなっているのは重要な特徴として指摘しうる。ペルシア語に次ぐ文章語としての伝統と豊穡さを誇り⁽¹⁶⁾、イスラーム共和国憲法のもとで一定程度の使用の自由を保障された現地語（＝アゼルバイジャン語、使用者自身は普通トルコ語と称する）に関する文献（辞書、文法書、解説書など）が14点に達し、他の諸地域では見られない特徴を示しているのはその一例であろう。

ギーラーンとマーザンダラーンは先にも述べたとおり、歴史的には別個の地域として認識されてきたとはいえ、国民国家イランの枠組みの中では類似

した一つの地理的範囲との認識も一方で生まれている。この両者を合わせれば208点にのぼり、これに「ギーラーン&マーザンダラーン」16点を加えると、実に224点に達し、アゼルバイジャンに次ぐ位置を占めることになり、地域としての存在感を十分に主張している。

ホラーサーンとファールスは、基本的には共に主としてペルシア人(Fārsī)の居住圏に相当し、その範囲は歴史的に拡大・縮小を繰り返してきているとはいえ、地域名称自体は連綿として継承されてきている。

さて、以上の諸地域に関する「地方史・誌」が多いだろうことは、十分に予測されたのであるが、それでは、ペルシア湾岸関係が104点とかなりの点数にのぼっているのは何故だろうか。実は、ここで言う「ペルシア湾岸」とは、現在の行政区分に従えばホルモズガン州とブーシェフル州を合わせた地理的範囲に相当する。もちろん、歴史的にはファールスの一部と考えられてきた時期が長く、当該地域が地方行政上、別個の区画として初めて設定されたのは、1961年に公布された「イラン帝国国家区分一覧」においてであった(表2参照)。にもかかわらず、本稿であえて「ペルシア湾岸」(Khalij-e Fārs)という地域項目の設定を行なっているのは、実に69点の多きにのぼる「地方史・誌」が、その表題の中で、この地域概念を用いているからにほかならない。このように、地方行政区分とは別に、単一の地域として認識される傾向が強い理由は、行政区分が新設のため定着度が低いということ以上に、地政学上の重要性が大きく関係していると考えられる。それはとりもなおさず、国民国家イランの存在をぬきにしては考えられない重要性である。というのも、他の地域に関するものと比較した場合、「ペルシア湾岸」関係のものからは、一つの顕著な特徴が浮かび上がってくる。それは、ボラズジャーン、バスタク、バンダレ・レンゲなどに関する数点は確かに一般的な意味での地誌であり、地方史と呼べるものであるが、残りの大部分、特に「ペルシア湾の……」とうたっているものは、ある特定の問題関心、それも極めて今日的問題関心から執筆されたものである。そのことは表題自体に端的に示されている。直接にペルシア湾を扱っているもので、その歴史地理、古代遺蹟、自然地理な

どを題材とするものを除くと、すべていわゆる「ペルシア湾問題」に集約されるのである。試しにいくつか表題を列挙してみよう。『ペルシア湾の危機と諸問題』、『ペルシア湾の政治史』、『ペルシア湾における変化と安定』、『ペルシア湾における国境の改変と地政学の役割』、『ホルモズ海峡の政治地理』、『ペルシア湾とイランの島嶼部』、『ペルシア湾とホルモズの戦略的役割』などなど。1342 (1963/64) 年に出版された『ペルシア湾セミナー』も、基本的には同様の意図で出版された報告書である。また、イラン外務省出版局からイスラーム革命後の1371 (1992/93) 年に出版された『ブー・ムーサー島と大小トンブウ島』などは、一見、地誌風の装いではあるがその実、加熱化しつつあったペルシア湾口のアブー・ムーサー島と大小トンブウ島をめぐる対岸のアラブ諸国との主権争いを背景に出版されたことは言をまたない。その意味ではペルシア湾関係のものの多くは、ある特定の地域を扱っているように見えながら、正に、国民国家イランの自己主張そのものであることが分かってこよう。

最後に「地方史・誌」の大地域別分布一覧表から気付いた点を一つ指摘しておこう。それは、この表に示されている10の大地域の中でも、「地方史・誌」の分布の密度に相当の偏差があることである。点数の多寡にかなりの差があるとしても、アゼルバイジャンには29の地域項目が含まれ、ホラーサーンとマーザンダラーンにはそれぞれ28の地域項目が見られる一方で、例えば、コルデスタンに着目すると、わずかに8地域項目しか含まれていない。州都であるサナンダジュとイラクとの国境に近いバーネ、それにケルマーンシャーハーン州に属するとはいえコルド人居住圏であるパーヴェェなどを除くとすべてコルデスタン（アルダラーンは先述のとおりコルデスタンの旧名）として一括された扱いとなっているのである。そのうえ、その多くがコルデスタンという地域概念を地理的範囲としてまず認識するというよりは、コルド人自身に関する事柄に記述内容が集中しており、「民族地域」としての扱いが突出する傾向を示している。こうした視点からは、コルデスタンの地域としての多面的理解がややもすると等閑に付されてしまうきらいがあるこ

とは否めないであろう。

もっとも、こうしたことは、表1にある「チャハールマハール&バフティヤリー」や「トルキヤマン・サフラー」といった地域項目（つまり、民族地域）の場合にも共通して見られる傾向であることを確認しておく必要がある。

第4節 「地方史・誌」の出版をめぐる問題（分析2）

さて、次に出版地に着目して「中央」と「地方」の関係の検討を進めてみよう。この目的にそって、予め用意された「地方史・誌」データを出版地別に整理しなおしたのが表4である。表4からはイランにおける出版状況の一つの明瞭な傾向が看取される。それは首都テヘランへの極端なまでの出版活動の集中であり、地方（都市）との間の歴然とした格差である。数値で確認してみよう。全1524点のうち、テヘランで出版されたものは835点にのぼり、これは全体のほぼ55%に相当している。続いてタブリーズ120点(7.8%)、マシュハド85点(5.5%)、シーラーズ71点(4.6%)、ラシュト43点(2.8%)、エスファハーン40点(2.6%)、ゴム33(2.1%)の順番で続いている。タブリーズ、マシュハド、シーラーズは都市としての人口規模から⁽¹⁷⁾いっても、また、それぞれの政治的・経済的・文化的重要度からしても、ほぼ順当な位置に場を占めていると言うべきであろう。エスファハーンが相対的に低い数値を示しているのは、後述するように出版インフラストラクチャーの整備の遅れが大きく影響しているものと推測される。一方、地方都市ではラシュトが健闘しており、また、ゴムが33点と、人口規模からすると不相応に多くなっているのは、マシュハドと並ぶイラン国内におけるイスラーム教学の中心であることを考慮すればさして不思議ではない。これら7都市の「地方史・誌」の出版点数を合計すると1227点となり、実に全体の80%を占めていることになる。

その他の都市での出版活動は、いわば例外的な事例と言えなくもない。た

だし、イスラーム革命後は、新政権の基本方針の一つとして、全国の州都はもちろんのこと、郡庁所在地レベルにまでイスラーム自由大学を次々と開設するなど、高等教育機関の拡散を図った結果、出版関係のインフラストラクチャーも各地で整備されるようになった⁽¹⁸⁾。それに伴い当該地での「地方史・誌」の編纂・出版活動にも大きな関心が向けられるようになり、かつてはあまり考えられなかったような地方都市（例えば、アーモル、アルダカーン、バンダレ・アンザリー、ザーヘダーン、サーヴェ、スウメ・サラー、ゴンバデ・カーヴース、ゴナーバード、ラール、ミヤーネ、ニシャーブールなど）で新たな出版がみられるようになり、また、オルミーエ、ホッラマーバード、ザンジャーン、ガーエム・シャフルなどでもイスラーム革命後に「地方史・誌」の出版が増えている。

ここで、少し変わった角度からの検討を二つ試みてみよう。一つは、それぞれの出版地で出版される「地方史・誌」の叙述対象となっている地域がどこであるか、という点である。首都テヘランはさすがに政府関係の出版施設が集中しているのみならず、民間の出版社も他都市とは比べものにならないくらいに圧倒的な集中を示しているだけあって、出版される「地方史・誌」の対象地域も多様であり、ほぼオールラウンドに全国にわたっている。そこで、残る6都市について若干の検討を試みてみよう。

タブリーズの場合は、当地で出版された「地方史・誌」120点のうち6点を除きそれ以外はすべてアゼルバイジャン関係のものである。このうちアゼルバイジャン全域に関するものが61点、タブリーズに関するものが33点であるから、アゼルバイジャンの諸都市（あるいは地域）に関するものでタブリーズで出版されたものの点数は19点となる。つまり、この地域を対象とした「地方史・誌」の総点数61点に対してタブリーズでの出版が占める割合は31%ということになる。同じ対象に関してテヘランの出版にかかるものは24点である。それでは、マシュハドの場合はどのような結果が得られるであろうか。

マシュハドの場合は、当地を出版地とする「地方史・誌」は85点であるが、このうち、ホラーサーン地方関係以外が12点であるから、マシュハドで出版

される「地方史・誌」のうち、73点がホラーサーン（マシュハドを含む）関連のものということになる。このうちホラーサーン全域を扱っているもの26点、およびマシュハド市に関するもの22点を除いた25点は、ホラーサーンの地方都市（あるいは地域）を扱っていることになる。同じ対象に関してテヘランで出版されたものの点数は47点であるから、したがって、当該対象全72点のうちマシュハドでの出版が占める割合は35%ということになる。

同様の計算をシーラーズとエスファハーン、そしてラシュトについて試みよう。その結果得られる数値は、それぞれ、シーラーズが46%、エスファハーンが14%、ラシュトが16%である。エスファハーンの割合が低いのは、例えば、エスファハーン大学が機能しはじめるのは1970年代に入ってからであることが示しているように、エスファハーンの都市としての出版インフラストラクチャーの脆弱性が考えられる。加えて、行政区分上はエスファハーン州に入っているとはいえ、カーシャーン、ナーイーン、ハーンサルなどはそれぞれ、地域的・文化的に高い自立性を有しているため、エスファハーンでの出版には直接結びつかないといった背景も考えられるであろう。

それでは、ここでもう一つの検討を試みてみよう。それは、表3に示されているような大まかに区分けされたそれぞれの地域に関する「地方史・誌」のうちでテヘランを出版地とするものが占める割合である。これを一覧表の形に整理し直したものが表5である。

ここに表れた数値だけから、ある判断を下すことはいささか早計かもしれないが、考え方の一応の方向性を示すことは許されるであろう。これらの数値の意味は大きく分けて少なくとも二つの観点から検討しなければならないであろう。一つは、当該地域における出版インフラストラクチャーの完備の度合いである。もう一つは、それぞれの地域が中央（政府）との関係で有しているそれぞれの特殊事情である。

イランにおいて出版インフラストラクチャーを考える場合、その重要な目安となるものが高等教育機関、具体的には大学の存在である。イランで最も古い歴史を有する大学はテヘラン大学であり1935年の創立である。これに続

く歴史を持つ大学は第二次世界大戦直後の1946年にピーシェヴァリーを指導者とするアゼルバイジャン国民政権の下で創立されたタブリーズ（アトルパトカンorアゼルバイジャン）大学である。パフラヴィー時代において、これ以外に有力な地方の総合大学としては、マシュハド（フェルドウスィー）大学や、完全なアメリカ方式によるパフラヴィー大学（1962年、シーラーズ）、1970年代の半ば頃からようやく総合大学としての体裁を整えはじめたエスファハーン（シャー・アッパース大帝）大学などがある。

表5が示しているように、アゼルバイジャン、ホラーサーン、ファールスなどほとんどの地域に関して、テヘランを出版地とする点数の割合はほぼ4～5割前後となっている中で、テヘランの出版にかかるものの割合が比較的高い水準を示している地域がペルシア湾岸地域関係であり、フーズスターン、コルデスターン、スィースターン&バルーチェスターンの諸地域も相対的に高い割合となっている。これらの諸地域の割合が高い理由としては、先ず出版インフラストラクチャーの脆弱さゆえに、やむをえずテヘランに依拠せざるをえないといった事情があるであろう。ちなみに、ペルシア湾岸地域における出版地としては、バングレ・アッパースを数えるのみであり、フーズスターンではスーサンゲルド、アフヴァーズ、ギャチサーラーン、デズフル、ホッラム・シャフル、ダシテ・ミーシャーンと出版都市の数は多いが、総じて出版活動の歴史は浅い。コルデスターンに関しては州都サナンダジュでわずかに1点、西アゼルバイジャン州に位置するコルド人都市マーハーバードで2点出版されているにすぎず、スィースターン&バルーチェスターンの場合も州都ザーヘダーンで2点の刊行が見られるのみである。

これにもう一つの背景として、当該地域が中央（政府）との関係で有している特殊事情を考慮することで、より鮮明に数値の意味が浮かび上がってくると考えられる。

まず、ペルシア湾岸地域に関してであるが、これはすでに指摘したように、その多くはペルシア湾におけるイランの主権の歴史的正当性の主張や、領海や湾内に点在する島嶼に関する領有権の主張といった事柄が主たる出版の動

機である⁽¹⁹⁾。いわば国民国家イランの国家的威信をかけた自己主張であり、本稿が想定していた「地方史・誌」とはいくぶん異なった性格のものであるのかもしれない。一方、スィースターン&バルーチェスタンおよびコルデスタン地域の場合は、明らかに「問題地域」への配慮の姿勢が窺える。つまり、それぞれバルーチ人、コルド人がらみのいわゆる「民族問題」をかかえる地域であるがゆえに、中央による当該地域への特別な関心と呼び、その結果が首都テヘランにおける関連文献の出版の盛況へとつながっていると考ええることも可能である。このことを端的に物語っているもう一つの事例がゴルガンやトルキヤマン・サフラーのトルキヤマン人居住地域に関するものの数値であろう。

この地域ではイスラーム革命前後から一部のトルキヤマン人による自治要求運動が見られ、同時にパフラヴィー時代にシャーが自らの一族や軍の高級将校、体制の受益者などに下賜した豊かな農業用地の再配分に端を発した騒動が発生するなど、中央(政府)にとっては由々しき「問題地域」の一つとなっていた。とりわけ、トルキヤマン・サフラー地域に関する「地方史・誌」の出版状況はこうした事情をよく物語っていよう。ちなみに関連文献全13点中12点(出版年不明1点)がイスラーム革命後に出版されたものである。しかも、そのうちの10点は地域としてのトルキヤマン・サフラーというよりは、民族集団としてのトルキヤマン人に関する分析となっている。

「地方史・誌」の出版ということであれば、当然時代的変遷にも目を向けなければならない。例えば、中央集権化の進展と「地方史・誌」の出版状況との関連性などが検証されねばならないであろう。この点に関しても一応の統計処理を行ってみたが、特に際立った特徴を抽出するには至らなかった。ただ、「地方史・誌」というよりはむしろ出版活動一般と考えた方が妥当と思われるが、以下のような傾向は明らかとなっている。つまり、1960年代後半頃から出版点数は増加の一途を辿り、70年代前半のオイル・ブーム期に最初の頂点に達している。それが革命直後の混乱期に一時低迷し、1990年代に入ると再び活況を呈するようになる。全体的にみれば、イスラーム革命後に「地

方史・誌」の出版が一段と活発化したことは大まかな傾向として指摘できるであろう。

小 結

以上、「地方史・誌」を材料に、特に、その対象となっている地域の範囲設定の傾向、あるいは、その分布状況、さらには出版地との関連の分析を通じて、国民国家イランにおける「地方」の位置と意味に関するごく大まかな傾向を掴むことができたと考える。しかし、本稿での検討は、先に断つてあるように、あくまでも「地方史・誌」のいわば外在的分析の域を出ていない。これまでの検討を通じて浮かび上がってくる問題、つまり、こうした「地方史・誌」の出版と「民族問題」、「地域問題」（これはとりもおさず「中央」・「地方」関係にほかならないのであるが）との内的関連性については、今回収集された「地方史・誌」の一つ一つの内容をつぶさに検討すること、つまり内在的分析をまたねばならないことは言うまでもない。その作業を通じてはじめて、所期の目的であった「中央」・「地方」関係の実質的考察に辿り着くことになる。その意味で、本稿はあくまでもそのための予備的考察にとどまることを断っておく。

〔注〕

- (1) この問題に関するイスラーム革命後の議論としては、特に以下の諸論考が有益。

L. Helfgott, "The Structural Foundation of the National-Minority Problem in Revolutionary Iran," *Iranian Studies*, Vol. XIII, Nos. 1-4, 1980, pp. 195-214/A. Aghajanian, "Ethnic Inequality in Iran: An Overview," *International Journal of Middle Eastern Studies*, No. 15, 1985, pp. 211-224/P. Higgins, "Minority-State Relations in Contemporary Iran," *Iranian Studies*, Vol. XVII, No. 1, 1984, pp. 37-71.

- (2) Ervand Abrahamian, *Iran Between Two Revolutions*, Princeton: Prin-

ceton University Press, 1982, pp. 9-18.

- (3) Hoseyn Bahro'l-'Olūmī, *Kārnāme-ye Anjoman-e Āthār-e Mellī*, Tehrān: Anjoman-e Āthār-e Mellī (131), 1355Kh, p. 13.
- (4) *Kārnāme-ye Bonyād-e Farhang-e Īrān*, Tehrān, 1350Kh, p. 4.
- (5) 各要件の類似性に注目した「地域」認識では、全体の中から、その一部を「地域」として認識させる根拠は、普通、共通性や類似性であるが、ひとたび「地域」を全体から切り出し、それを特徴づけようとするや、こんどはその「地域」の内的多様性や複雑性を強調するという、相反する方向を同時に追求することになる。こうした問題点を批判して、各要件の関係性において「地域」を設定しようとする議論があるが、本稿の関心は「地域」認識がどうあるべきかではなく、各「地方史・誌」において実際に「地域」はどのような範囲として認識されてきたか、という問題であることを断っておく。
- (6) アゼルバイジャンについては、*Ketāb-shenāsi-ye Ādharbāyjān* (Najībe Afnānī編, Dāneshgāh-e 'Allāme Tabātabāyī, Tehrān, 1372Kh) が、ホラーサーンに関しては、*Ketāb-shenāsi-ye Khorāsān* (Mohammad 'Alī Khākestari編, Mashhad: Kongre-ye jahānī-ye hazrat-e Rezā, 1367Kh) が、ファールスに関しては、*Ketāb-shenākhte-ye Fārs* ('Aziz Deyhimi編, Shirāz: Navid-e Shirāz, 1363Kh) が、またギーラーンに関しては、*Ketāb-shenāsi-ye Gilān* ('Alī Āqā Bakhshī編, Tehrān: Vezārat-e Farhang o Āmūzesh-e 'Alī, bī-tā) および、*Ketāb-shenāsi-ye Gilān*, 2 vols. (M. T. A. Jektāji他編, Rasht: Sāzemān-e Barnāme o Būdje-ye Ostān-e Gilān, 1368-1370Kh) が、マーザンダラーンに関しては、*Ketāb-nāme-ye Māzandarān*, 2vols. (Hoseyn Samadī編, Sāri: Sāzmān-e Barnāme o Būdje-ye Ostān-e Māzandarān, 1372Kh) が、さらにバルーチェスターン&スィースターンに関しては、*Ketābnāme-ye Sistān o Balūchestān* (Hojjatollāh Hasan Lārijānī編, Tehrān: Vezārat-e Barnāme o Būdje, 1365Kh) が、ロレスターンについては、*Ketāb-shenāsi-ye Lorestān* (Ghorām Hoseyn Hoseynpanāh編, Khorramābād: Khorramābād, Edāre-ye koll-e farhang o honar-e Lorestān, 1357Kh) および、*Ketāb-shenāsi-ye Towzīhī-ye Lorestān* (Khorramābād: Edāre-ye koll-e Farhang o Ershād-e Eslāmi-ye Lorestān, 1372Kh) が、また、ペルシア湾岸地域関係でも、*Ketāb-shenāsi-ye Mowzū'i-ye Khalij-e Fārs* (Bizhan Asadī編, Tehrān: Daftar-e Motāle'āt-e Siyāsī o Beyno'l-Melali, 1368Kh) が刊行されている。テヘラン関係では、*Ketāb-shenāsi-ye Tehrān* (N. Takmil-Homāyūn編, Mo-'assese-ye Motāle'āt o Tahqīqāt-e Farhangī, 1369Kh) がある。
- (7) 『エスファハーン書誌』(*Ketāb-shenāsi-ye Esfahān*) (Nāser Pākdāman, 'Abdo'l-Hoseyn Ādharang編, Tehrān: Vezārat-e Farhang o Honar, 1354Kh), 『パフラヴィー時代にけるホラーサーン関係刊本目録』(*Fehrest-e Kotob*

-e *Chāpī-ye Khorāsān dar 'Asr-e Pahlavī*) (Mashhad: Edāre-ye Koll-e Farhang o Honar-e Khorāsān, 1355Kh) などがあげられよう。

- (8) 内訳を示すと以下のとおり。アゼルバイジャン (23点), アラク (2点), アルデスターン (1点), アルダビール (2点), アラスバーラーン (1点), エスファハーン (18点), エヴァズ (1点), バーボル (1点), [ボハーラー (1点)], ボラーズジャーン (1点), バスターム (1点), バルーチェスターン&スィースターン (9点), ベント (1点), ベフベハーン (1点), ベフシャフル (2点), パサルガード (1点), タプリーズ (6点), タフテ・ジャムシード (1点), タフテ・ソレイマーン (1点), テヘラン (8点), ジャンダク (1点), ジョンディー・シャープール (1点), ジャフロム (2点), チャールス (1点), ホラーサーン (16点), ハールグ島 (3点), ホッラム・シャフル (2点), ハルハール (1点), ペルシア湾岸 (33点), ハーンサール (1点), フーゼスターン (7点), ダームガーン (2点), ダルギヤズ (2点), レザーイエ (3点), ダマーヴァンド (1点), ルーヤーン (2点), レイ (4点), ザンジャー (1点), サラフス (2点), ソルターニーエ (1点), セムナーン (1点), スィーラーフ (2点), シューシュ (1点), シーラーズ (11点), シャフレザー (1点), タバレスターン&マーザンダラーン (13点), ファールス (10点), ガーエナート&コヘスターン (1点), ガズヴィーン (2点), ゴム (14点), ガスラーン (1点), グーメス (1点), カーシャーン (5点), カーゼラーン (1点), コルデスターン (7点), ケルマーン (18点), ケルマーンシャーハーン (3点), コフギールーエ (1点), ゴルガーン (5点), ギャルムサール (1点), ゴナーバード (1点), ギーラーン (21点), ラーレスターン (1点), ラーヒージャー (1点), ロレスターン (2点), マラーゲ (2点), マランド (1点), マルヴダシュト (1点), メシュギーン・シャフル (1点), マラーエル (2点), ナーイーン (1点), ニーシャープール (2点), ヌール (1点), ヴァラーミーン (2点), ハメダーン (4点), ヤズド (4点)。
- (9) 収集方法としては、筆者がこれまで個人的に収集した500点強をもとにして、これに、ハーンバーバー・モシャール著『ペルシア語刊本総目録』(Khān-bābā Moshār, *Fehrest-e Ketābhā-ye Chāpī-ye Fārsī*, 5 vols., Tehrān, 1350-1355Kh), アリー・プールサファル著『イラン立憲革命文献目録』(A. Pūrsafar, *Ketāb-shenāsī-ye Enqelāb-e Mashrūtiyat-e Īrān*, Markaz-e Nashr-e Dāneshgāhī, Tehrān, 1373Kh), 加えて、前掲の地方関係の諸書誌目録から採録した。また、これら刊本目録では補いきれない部分に関しては、「アーヤンデ」(Āyande), 「ナシュレ・ダーネシュ」(Nashr-e Dānesh), 「考古学・歴史雑誌」(Majalle-ye Bāstān-shenāsī o Tārikh), 「書籍案内」(Rah-nemā-ye Ketāb) などの学術雑誌に掲載される、簡にして要を得た内容紹介を含む新刊案内に主として依拠した。さらに、革命後発行されている「書誌」

(Ketāb-nāme) も貴重な情報源となった。

収集に際して、対象とした出版時期の範囲は、「中央」・「地方」という二項対立的関係が成立する前提としての国民国家的枠組みを考慮して、19世紀末から立憲革命期以降現在（1995年）までとした。イスラーム革命後は憲法第15条によって、ペルシア語以外の諸言語による出版活動にも一定程度の自由が与えられているが、少なくとも、「地方史・誌」の分野では未だ顕著な傾向とはなっておらず、今回はペルシア語文献のみを収集の対象にした。また、再刊行の可能性を考慮して単行本に限定し、雑誌論文の類は除外した。さらに、刊本（石版を含む）でイラン国内の発行（特例あり）にかかるもののみに限定し、手稿本・学位論文の類は除外した。

また、特定の地域を扱っているものでも、官公庁の出版物、例えば、報告書 (gozāresh), 統計 (āmār), 計画書 (tarh/barnāme), 業務報告書 (kār-nāme), 実績報告 ('amalkard), 会報 (khabar-nāme), 年報 (sāl-nāme) といった類は基本的には除外した。加えて、特定の地域を記述の対象としていながらも、必ずしも「地域性」の認識を志向したものではなく、特定の領域のみに偏っているもの（例えば、『デズフルにおけるトラホーム撲滅』）も除外の対象とした。

点数計算の基準としては、同一の表題であっても、版年によって少しでも内容異なるものは別個のアイテムとした。例えば、『マラーゲ』という地方誌は、初版は1360 (1981/82) 年に、第2版は1370 (1991/92) 年に出版されているが、著者、版地ともに同じであるものの、前者の頁数が715ページ、後者は1033ページと大幅に増補されている。この場合は異なるアイテムとして扱った。また、複数巻のものについては、内容に連続性があり、版年・版地などが同一の場合には同一のアイテムとして扱ったが、それらが異なっている場合には別個のアイテムとして収録した。

なお、本稿の検討の対象となった「地方史・誌」の目録本体は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の出版物として刊行予定である。

- (10) 以下のものに拠って作成。Gaspard Drouville, *Voyage en Perse : Pendant les Annees 1812 et 1813*, Paris, 1819, pp. XIII-XVIII/Mohammad Hasan Khān E'temādo's-Saltane, Īraj Afshār (be-kūshesh), *Chehel Sāl-e Tārikh dar Īrān dar Pādshāhi -ye Nāsero'd-Dīn Shāh (al-Ma'āther va al-Āthār)*, Tehrān: Enteshārāt-e Asātīr, 1363kh, jeld-e avval, pp. 420-429/ "Taqsimāt-e Keshvar-e Īrān", *Dāyerato'l-Ma'āref-e Fārsī (be-sarparastī-ye Ghorām Mohsen Mosāheb)*, Tehrān: Enteshārāt-e Frānklin, 1345kh.
- (11) Guy le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, London: Frank Cass & Co. Ltd., 1966, pp. 85, 364-368.

- (12) 'Abdo'l-Rafi' Haqiqat, *Tārikh-e Qāmes*, Tehrān: Enteshārāt-e Āftāb, 1362Kh, p. 25.
- (13) Mohammad Hasan Khān E'temādo's-Saltane, Īraj Afshār (be-kūshesh), *Chehel Sāl-e Tārikh dar Irān dar Dowre-ye Pādshāhi-ye Nāsero'd-Dīn Shāh (al-Ma'āther vaal-Āthār)*, Tehrān: Enteshārāt-e Asātir, 1363Kh, jeld-e avval, pp. 420-429.
- (14) *Majmū'e-ye Mas'ūbat-e Majles-e Shūrā-ye Mellī dar Chahār Dowre-ye Taqni'niye*, [Tehrān]: Matba'e-ye Majles, bi-tā, pp. 59-64.
- (15) *Majmū'e-ye Qavānin-e Mowzū'e va Masā'el-e Mas'ūbe-ye Dowre-ye Yāzdahom-e Qānūn-gozāri*, [Tehrān], bi-nā, bi-tā, pp. 332-350.
- (16) 「ペルシア語は甘美であるが、トルコ語は芸術である」(fārsī shekar ast va torkī honar ast) という表現は、彼らの自負を端的に示している。
- (17) 参考までに、1991年の統計による各都市の人口規模を示しておこう。テヘラン721万人、マシュハド182万人、エスファハーン116万人、タブリーズ110万人、シーラーズ97万人、ゴム77万人、ハメダーン37万人、ケルマーン33万人、カーシャーン32万人、ヤズド28万人。
- (18) 例えば、ガーエム・シャフル(旧名シャーヒー)では、1372(1993/94)年に、『サーリー2千年史』が、翌年には『マーザンダラーン紀行』が、イスラーム自由大学ガーエム・シャフル分校出版局から出版されている。また、1371(1992/93)年には、おなじくイスラーム自由大学メイボド分校が版元となり(出版地はヤズド)、『メイボド市の旧貌』が出版されている。
- (19) これは近年だけの特徴ではなく、歴史的にもペルシア湾関係の文献は同様の性格を有していたことが指摘されている。Ahmad Eqtedārī, "Manābe'-e Ketāb-shenāsī dar bāre-ye Khalij-e Fārs va Sarzamīnhā-ye Pirāmūn-e Ān," *Ketāb-namā-ye Irān*, Tehrān: Nashr-e Now, 1366Kh, pp. 355-361.